

大乘『涅槃経』の思想的発展

—四相品に見られる説話を中心に—

森山結希

一 はじめに

現存する漢訳の大乘『大般涅槃經』は三本存在する（以下『涅槃經』と総称）。その三本の中国での訳出は年代順に、東晋法顕・仏駄跋陀羅訳の六卷『大般泥洹經』（以下「六卷本」と略称）が四一八年、曇無讖訳の四十卷『大般涅槃經』（通称、「北本」以下「大本」と略称）が四二一年とされている。⁽¹⁾ また訳経ではないが鳩摩羅什門下であった慧嚴・慧観や当代の文人として著名であった謝靈運らが再治した三十六卷『大般涅槃經』（通称、南本）⁽²⁾の成立が四三〇～四三三年頃とされている。⁽³⁾

南本は大本を基に六卷本を参照しつつ編纂された再治本であるが、南本の基になった大本と六卷本はそもそも別々の土地と訳者によって翻訳された經典である。しかし、南本編纂時の六卷本と大本に対する認識は、編集者の一人である慧嚴の伝記⁽⁴⁾によると、両本は同一の内容を持つ經典であると認識していた事が窺える。そして現在では、六卷本は大本の前半十卷分に相当する經典であるという認識が一般的である。

右の様に、六卷本と大本の両本は内容的に相応する部分があることは間違いないであろう。しかし、両本はまったく同じ内容の經典では無く、大本にのみ確認できる思想などの存在が布施「一九四二」⁽⁵⁾などによって指摘されている。

本稿は先学の指摘に依りつつ、現存する漢訳大乘『涅槃經』間に存在する思想的な展開を、テキスト間に見られる説話の有無という観点から確認するものである。

本稿ではまず四相品⁽⁶⁾を考察対象とし、六卷本と大本との比較を行う。そして大本四相品の中に存在する、六卷本には見られない「波斯匿王」と「摩訶波闍波提憍曇弥」の説話を確認する。これ等の説話は、既に河村「一九七〇」によって、六卷本には存在せず大本のみ採用されているものであることが指摘⁽⁷⁾されている。しかし、何故その説話が大本のみに存在するのかについては、考察の余地が残されていると筆者は考える。

このことから大本のみに説話が見られる理由を、大本の中で「秘密藏」の内容として開示され、悉曇文字で例えられる「伊字の三点」に求めてみたい。この「伊字の三点」とは、布施「一九四二」において指摘されている様に、六卷本には見られない術語である。この「伊字の三点」が大本の中でどのような位置づけにあるか、大本固有の視点として『涅槃経』間で説話の有無にどのような影響を与えているかを確認したい。

二 四相品における両本の同異

『涅槃経』四相（六卷本では「四法」）品の冒頭では、前品の名字功德品において示された「大般涅槃（大般泥洹）」を、菩薩が衆生に説く為に、四つの側面から説く事が示される。

その四つの側面とは、「自正」、「正他」、「能随問答」、「善解因縁義」の四つであり、『涅槃経』もしくは大乘經典の教えを前提としてしていると推測でき、その意味は字の通りである。「自正」とは正しく教えを理解して、自らを正していくことである。「正他」とは他者を正し、正しい教えに導くということである。「能随問答」とは相手の問いに応じて教えを説くということである。「善解因縁義」とは物事がその様になった因縁をよく知るということである。これ

が「大般涅槃」を開示するための四つの側面であり、これらの四つの側面が譬喩などを交えて順に解説されていく。

また、四つの側面の総括に当たる部分では、「自正」が「大般涅槃」を得ること（六巻本では「大般泥洹」に向かう）、
「正他」が「如来常住」を説くこと、「能随問答」が迦葉菩薩との問答、「善解因縁義」が「大般涅槃」の因縁を説く
こととなっており、個別の側面が何を目的としたものなのかを示していると思われる。

四相を説くこの品を含めて、両本間では文章量の増減が多々見られる。多くの場合は六巻本よりも大本の方が、各
解説をより丁寧の説明する為に文言を費やしているに過ぎず、両本の主旨が大きく異なる事は無い。しかし、四相が
譬喩と共に順を追って説示された後から両本間の相異点が現れはじめる。それが四相の総括を行う箇所である。

どのような異なりかと言えば、それは四相品以前にも大本にのみ示される、悉曇文字に例えられる「秘密藏」の内
容としての「解脱・涅槃・摩訶般若」の「伊字の三点」⁽⁸⁾の存在である。この「伊字の三点」が存在することによって、
大本は六巻本よりも明確に「四相とは各々の相が同じ意味を持つものである」⁽⁹⁾ことを示す内容となっている。さらに
それは「四相は別々の内容をもって解説されたが、全て大（般）涅槃（経）を指しており、異なるわけではない」⁽¹⁰⁾と
いうことが強調される。この両本の異なりが以降の四相品に対して、どのような影響を与えているかは後に改めて考え
たい。

四相を説き終えた後、四相品の内容は「如来常住」の教えに対する疑問の解消へと移っていく。その中で、如来と
して煩惱を滅しきっているはずの釈尊が、「何故、羅睺羅をもうけたのか」という矛盾が指摘される。⁽¹¹⁾この指摘に対
して、「大般涅槃」の教えを基に行ずる菩薩の解説の後、釈尊の生涯を含めた様々な神通変化の例を挙げ、それらは
世間に随順して衆生を済度する為の方便であることを説明する。

多くの神通変化と世間随順の例が挙げられた後、「灯器の譬喩¹²⁾」と「灯滅の譬喩¹³⁾」によって、煩惱の滅とされてきた既存の涅槃と如来身の関係、そして「大般涅槃」を示現する如来と阿那含の化生身とが似て非なることを説明する。ここまでの四相品全体の内容では、四相品以前に既に示された「如来常住」に端を発する仏身観について、視点を改めて解説したものと考ええる。

次に話題が変わり、釈尊が『涅槃経』の教えを隠していた事が問題となり、その回答として「長者教子の譬喩¹⁴⁾」などが示され、隠していたのではなく対機説法であったことが明かされる。この箇所では、この譬喩の前に『涅槃経』の教えを隠していた事についてと、譬喩の後に説話が挿入されるといふ両本の異なりが見られる。その箇所の両本間の異なりとは、

【六卷本】

云何が世尊よ、如来は亦、隱秘の法有りて幻刺の如きや。

(大正十二、八七二a、二六一―二七行)

【大本】

世尊よ、仏の所説の如く「諸仏、世尊に秘密蔵有り」と。是の義は然らず。

(大正十二、三九〇b、一五一―一六行)

とあり、六卷本では「隱秘の法」に当たるものが、大本では「秘密蔵」となっており、前述した大本固有である「秘

「密藏」としての「伊字の三点」からの影響を感じさせるものとなっている。そして「長者教子の譬喩」の後、大本では「波斯匿王」の説話が挿入されているが、六卷本は説話が挿入されていない。説話自体の考察については、章を改めて行いたい。

「長者教子の譬喩」の後（大本では「波斯匿王」の説話が挿入された後）、両本の内容は、「積聚（蔵積）¹⁵⁾」という行為を採り上げる。このことは「隠秘の法」や「秘密蔵」として追及された事に対する回答である。この回答は、如来には、蔵する、蓄えるなどの行為が存在しない事を示して、秘密の教えは存在しない事を説明する内容を持つ。

次に「涅槃」とは、諸の瘡疣が無いことである¹⁶⁾と示し、良医に例えられた如来は、瘡疣に例えられる煩惱に患わされる衆生を救済する事が説かれる。それによって、既存の二乗の「涅槃」と衆生済度の為の「大般涅槃」との違いを説明し始める。この中で、「大般涅槃」とは「解脱」である事が示され、次に「解脱」へと論点が移っていく。

この「解脱」を解説する箇所は「百句解脱」と呼ばれ、「解脱とは如来である」とまとめつつ、多くの『涅槃經』の「解脱」の例を、譬喩を交えながら解説していく。この中にも両本の異なりが存在する。

その異なりとは、三帰依を譬える「三跳三帰の譬喩」¹⁸⁾の後に存在する。大本では譬喩の解説のまとめ部分において、三帰依によって得られる安楽とは、「涅槃・仏性・決定・如来」が等しく同じものであるとされる。六卷本の相当箇所では、大本の様なまとめは見られないのである。大本では、この「三跳三帰の譬喩」のまとめを導入部として、「涅槃・仏性・決定・如来」が一義である事に答える為に、「摩訶波闍波提憍曇弥」の説話が存在している。先の「波斯匿王」の説話に続き、「摩訶波闍波提憍曇弥」の説話に関しても、章を改め考察を行いたい。

続いて、両本ともに「解脱」のまとめに入り、「解脱は如来であるが、如来は虚空ではない」と説明され、説かれ¹⁹⁾

た譬喩に対する固執や誤解が戒められる。

四相品の末尾では、如来は衆生済度の為に方便と実法の二つを説いている事が明かされる。そして、『涅槃経』の「解脱」を解説する為に「百句解脱」と呼ばれる程に多くの例を挙げているが、それらの例の様に無量の功德をそなえるので、「解脱」と同義である「如来」の涅槃を「大般涅槃」と呼ぶことが明かされて四相品は終る。

この様な四相品の流れの中で、六巻本に存在しないものは、「秘密蔵」や「伊字の三点」の再説に関わる四相の総括と二つの説話である事が挙げられる。次章では大本が採用している説話を確認してみたい。

三 大本引用の説話の確認

前章では、六巻本と大本の間では四相品の展開は相似しているが、細かな思想的な部分では異なりが有ることを確認した。次に、先に確認した四相品の中に存在した、大本が採用している説話を河村「一九七四」を参照しつつ確認したい。

最初に「波斯匿王」の説話、次に「摩訶波闍波提憍曇弥」の説話を確認していく。

(一) 「波斯匿王」

「波斯匿王」に関する説話の直前の内容は大本中において「秘密蔵」という教えを秘密にし、「蔵(隠す)」していったのは何故かが迦葉菩薩によって問われる。この質問に対して釈尊は、秘密にしていたわけではないとして、「長者

教子の譬喩」を説き、「声聞弟子の習熟度に合わせて教えを説いてきただけである」と説明する。

「長者教子の譬喩」は、長者が我が子に半字を教えて、成長して学ぶ力が付いた後に毘伽羅論を教える、という内容である。釈尊によるこの譬喩の解説として、長者は如来を、一子とは一切衆生、更に転じて声聞弟子を例え、半字は九部経、毘伽羅論は方等大乘經典に例えて説かれる。そして、最後に毘伽羅論に例えられた大乘經典の内容は「如来常存不変」であることを明かし、譬喩の解説は終る。

つまり、この箇所では九部経は大乘を教える為に必要なものであったと認めており、ここで毘伽羅論に例えられた大乘經典とは、「如来常住」を説く經典である『涅槃經』を指すと考えられる。

次に説話を確認する。

迦葉菩薩、復言わく、「我、今定んで如来、世尊に秘藏する所無きを知る。仏の所説の如し。毘伽羅論には（仏、如来は常存にして不変なり」と謂う。是の義は然らず。何を以ての故に。仏は昔、偈を説きたもう。

諸仏と縁覚、声聞弟子衆は 猶無常の身を捨つ 何に況や諸の凡夫をや

今は乃ち常存無変を説く。是の義は云何」と。仏言わく、「善男子よ、我は一切声聞弟子の為に半字を教えるが故に偈を説けり。又、善男子よ、波斯匿王の其の母命終す。悲号恋慕するに自らに勝ること能わずして我が所に來至す。我即ち問うて言わく、（大王よ、何の故に悲苦懊惱し乃ち此に至るや」と。王言わく、（世尊よ、国大夫の某日命終せり。仮使し能く我が母をして命還ること本の如くならしめる者有らば、我、当に国を捨て象馬、七珍及び身命の悉くを以て之に報いるべし」と。我、復語りて言わく、（大王よ、且く愁悩憂悲して啼哭する

こと莫れ。一切衆生の寿命の尽きるとは、之を名づけて死と為す。諸仏、縁覚、声聞弟子も尚此の身を捨つ。況や復凡夫をや」と。善男子よ、我、波斯匿王の為に半字を教うるが故に是の偈を説く。我、今諸の声聞弟子の為に毘伽羅論を説かん。謂る、(如来は常存にして変易有ること無し)と。若し人有りて如来は無常と言わば、云何が是の人の舌、墮落せざるや」と。

(大正十二、六三一b、一一一八行)

右の様に、迦葉菩薩は「長者教子の譬喩」の解説末の『涅槃経』中で繰り返し説かれる「如来常存不変」と、かつて釈尊が説いた教えである「諸仏与縁覚 声聞弟子衆 猶捨無常身 何況諸凡夫」と示される偈頌との矛盾を指摘する。この迦葉菩薩の指摘に対して釈尊は、声聞弟子に半字を教える為に偈頌を説いたのであるとして、波斯匿王との故事を用いて説明する。

迦葉菩薩の疑問によって引き出されたこの故事は、河村「一九七四」によれば求那跋陀羅訳『雑阿含経』（第一二二七経）²⁰などに同内容のものと指摘されている。

阿含經典における説話では、母（もしくは祖母）の死に対して、哀しみにくれた波斯匿王が葬儀の後に祇園精舎の釈尊のもとを訪れる。釈尊は波斯匿王に対して、「生ける者すべてには必ず死が訪れる」と説き、仏や声聞、縁覚も死ではないが、修行の結果として己が身を捨てる事、つまり「無常」であることを説明している。この様に『雑阿含経』（第一二二七経）と大本とは細かな違いはあれども、内容は概ね同様である。

では、大本の独自性とは何であろうか。それは、先ほど挙げた大本独自のまとめの部分に見られる。このまとめ部

分では、波斯匿王に偈を説いた当時には、「波斯匿王に半字（九部經）を教える為に説いたのである」と述べ、続けて「今は（『涅槃經』が説かれている会座では）声聞弟子の為に、如来は常存であり変易することは無い、と説明しているのである」と述べる。つまり、「無常」の教えを説いたのは、説話当時の波斯匿王の為であり、今は涅槃經の会座にいる者達の為に「如来常住」を説いている事が説明されているのである。

そして最後に「如来常存不変」が真実であることを強調するために、「如来は無常である」と述べた者の舌は地に落ちると締めくくられている。

（二）「摩訶波闍波提憍曇弥」

「摩訶波闍波提憍曇弥」に関する説話は、四相品中の『涅槃經』における「解脱」が示される中で見られるものである。その中でも「三跳三帰の譬喩」の解説部分をきっかけとして引き出されるものである。

では、説話が説かれるきっかけとなる「三跳三帰の譬喩」の解説部分を含めて確認してみたい。

迦葉菩薩、仏に白して言く、「世尊よ、若し涅槃、仏性、決定、如来、是れ一義ならば、云何が説きて（三帰依有り）と言うや」と。仏、迦葉に告げたまわく、「善男子よ、一切衆生は生死を怖畏するが故に三帰を求む。三帰を以ての故に則ち仏性、決定、涅槃を知る。善男子よ、法に名は一にして義は異なる有り。法の名と義は俱に異なる有り。名は一にして義は異なるとは、仏は常、法は常、比丘僧は常、涅槃、虚空も皆亦是れ常なり。是れを名は一にして義は異なると名づくるなり。名と義は俱に異なるとは、仏を名づけて覺と為す。法を不覺と名づ

く。僧を和合と名づく。涅槃を解脱と名づく。虚空を非善と名づけ、亦無礙と名づく。是れを名と義は俱に異なると為す。善男子、三帰依とは、復亦是の如し。名と義は俱に異なるなり。云何が一と為すや。

是の故に我、摩訶波闍波提憍曇弥に告げたまわく、(我に供養すること莫れ。当に僧に供養すべし。若し僧に供養せば則ち具足するに三帰に供養することを得)と。摩訶波闍波提、即ち我に答えて言わく、(衆僧の中に仏無く、法無し。云何が説きて《衆僧に供養すれば、則ち具足するに三帰に供養することを得》と言うや)と。我、復告げて言わく、(汝、我が語に随わば則ち仏を供養するなり。解脱の爲の故に即ち法を供養するなり。衆僧受くれば則ち僧を供養するなり)と。

善男子よ、是の故に三帰は一と為すを得ず。善男子よ、如来は或る時、一を説きて三と為し、三を説きて一と為す。是の如くの義は、諸仏の境界にして声聞、縁覚の知る所に非ず」と。

(大正十二、三九五c、一七一—三九六a、七行)

ここでは、「三跳三帰の譬喩」を導入として「涅槃・仏性・決定・如来などが同じ意味であるならば、何故、三帰依を説くのか」という疑問が提示されることから始まる。三帰依とは「仏・法・僧」の三つに帰依する事を指す。ここでは三宝が各々別ではなく、一であるならば、何故に「三」帰依として説くのが問題となっていると考える。

この迦葉菩薩の疑問に対して釈尊は、二つの事例を提示する。それは、法とは「名は一にして義は異なる」場合と「名と義は俱に異なる」場合の二つの事例である。そして三帰依は後者の「名と義は俱に異なる」事例に相当すると説明される。この「名と義は俱に異なる」事例を更に説明する為に「摩訶波闍波提憍曇弥」の説話が説かれるのであ

る。

説話の内容としては、釈尊が自身の叔母であり養母である摩訶波闍波提に対して、「私に供養するべきではない。僧伽に供養すれば、三宝すべてに供養することになる」と、諭すことから始まる。唐突な始まりではあるが、おそらく摩訶波闍波提が釈尊に対して供養しようとしたという設定であろう。

この様な摩訶波闍波提と釈尊との説話は大本以外にも確認できる。河村「一九七四」によれば、瞿曇僧伽提婆訳『阿含経』「瞿曇弥経」(第一八〇経)²¹などに同様の説話が記されている。

その内容は、釈尊が故郷であるカピラヴァストウで、養母の瞿曇弥(マハーパジャパティー)を指し、大本では「憍曇弥」と訳されている)から真新しい衣を布施される場面が記されている。この場面の釈尊は、「私個人に布施するのではなく、僧伽に布施した後に私や僧伽の皆に布施すべきである」と、釈尊にのみ布施しようとする瞿曇弥を再三にわたり忠告している。

この「瞿曇弥経」の冒頭の様子は、大本との共通点が見出せる。しかし、「瞿曇弥経」では布施における施者と受者の関係を問題として、布施の理想的な在り方を解説するものであり、大本と内容は異なる。

では大本では、何を表す為に説話を使用しているのだろうか。大本では、「僧伽に供養しなさい」という釈尊の言葉に対して、摩訶波闍波提は「(釈尊を除いた)僧伽の中には、仏も法も存在しないのに、何故三宝に帰依することになるのか」との疑問を述べる。すると釈尊は「私の言葉に随えば、仏を供養する事になる。さらに私の言葉に随うという事は、解脱を目指す為であるのだから法を供養する事になる。そして、(最初に指示した)僧伽に供養するならば、僧に供養することになるのだ」と、答えて説話は終わっており、三宝の内の一つに供養すれば三宝すべてを供

養する事に繋がると述べている。

又、説話直後には「如来は或る時、一を説きて三と為し、三を説きて一と為す。」と示して、如来の説法は機に応じたものであると説明される。このことから、大本では供養する事に主眼を置かず、説話直前の經典の文脈に従い、法の説き方に主眼を置く為に引用されていると考える。

以上の様に、二つの説話は共に、先行して存在した素材を引用し、『涅槃経』の教理に合わせて編集し直されたものと考ええる。以上が、今回の考察対象となる説話である。

四 大本固有の視点とその意義

次に、六卷本と大本との相異点の始まりとなる、四相の総括の異なりに影響を与えていると考えられる「伊字の三点」の初出と再説箇所や、「伊字の三点」の背景となる「秘密藏」と「如来常住」の初出箇所を確認しつつ、大本が引用した二つの説話の意義を求めてみたい。

(一) 伊字の三点

大本四相品に大きく影響を与えていると考えられるのは、「伊字の三点」の存在である。²²⁾ まずこの「伊字の三点」が、どの様にして大本に登場したのかを確認したい。

【六卷本】

「復次に比丘よ、百穀、藥木及び諸の珍宝、皆地より出ず。一切衆生は依りて生長を得たり。如来は是の如くの妙善を生じて諸の甘露の法を出す。衆生は此れに因りて法身を長養す。是の故に、比丘は当に疑う所を問うべし。如来は悉く為に決定義を説き、然る後泥洹す。一切の諸の衆生を安樂せんが故に」と。

(大正十二、八六一c、五一九行)

【大本】

「諸比丘よ、譬えば大地の諸山、藥草を衆生の為に用いるが如し。我が法も亦爾り。妙善を生じて甘露の法を出だして、而して衆生の種種の煩惱病の良藥と為す。我、今当に一切衆生及び我が子四部の衆をして、悉く皆秘密藏中に安住せしむるべし。我も亦復当に是の中に安住して涅槃に入るべし。何等を名づけて秘密の藏を為すや。猶伊字の三点の如し。若し並べば則ち伊を成ぜず、縦も亦成ぜず。摩醯首羅の面上の三目の如し。乃ち伊の三点を成ず。若し別なるも亦成ずるを得ず。我も亦是の如し。解脱の法も亦涅槃に非ず、如来の身も亦涅槃に非ず、摩訶般若も亦涅槃に非ず。三法各異なるも亦涅槃に非ず。我、今是の如きの三法に安住して、衆生の為の故に涅槃に入ると名く。世の伊字の如し」と。

(大正十二、三七六c、六一一七行)

右記が、哀歎品で確認できる「伊字の三点」(点線部)の初出箇所である。比較の為に両本の該当箇所を挙げた。

この箇所ですべて述べられている事は、両本ともに「入滅はする事には間違いないが、如来常住について比丘衆をはじめとした会衆に説明した後に入滅する」という内容に違いは無い事が分かる。

その中で大きく異なるのは、後述する比丘衆からの懇願に答える形で語られる、「秘密藏」の内容として示される「伊字の三点」である。この「伊字の三点」とは、先行研究²³⁾では悉曇文字の「𑖀」の字を指すとされている。大本の説明の中では、「摩醯首羅の三つの眼の配置の様であり、それは横や縦に並ぶものではない」とある。これは三つの点が付かず離れず、増減せず、相即不離の關係にある事を説明している。そして大本では、その「伊字の三点」が「解脱・如来身・摩訶般若」として示されている（傍線部）。しかし六巻本では「伊字の三点」を開示する箇所が存在しない。次に、四相品における相異に影響を与えていると考えられる、四相品での「伊字の三点」が再説される箇所を見つめる。

【大本】

声聞、縁覚は是の如きの甚深の義を解せず、伊字の三点の解脱、涅槃、摩訶般若を成じて、秘密藏を成ずるを聞かず。我、今、此に於いて闡揚し分別して、諸の声聞の為に慧眼を開発す。

(大正十二、三八七b、一〇—一三行)

右の様に、大本では声聞の為に「秘密藏」としての「伊字の三点」である「解脱・涅槃・摩訶般若」を開示している事が示される。

六巻本にも「秘密藏」に類似した言葉として、「種種秘要方便密教」が存在しており、それは声聞には理解できな
いとされている。しかし、六巻本では「伊字の三点」が示されない為に、直後の四相の総括部分では大本との異なり
が存在している。

それは、四相品では四相として示される「自正・正他・能隨問答・善解因縁義」の四つが一義であると述べられる
箇所である。

【六巻本】

彼の衆生の心想の応ずる所に随いて、為に法を説くとは虚妄と為すに非ず。譬えば、人有りて虚空の多くの名を
説くが如し。空と為し、虚と為し、無所有と為し、無数と為す。是の如くの等の説は、皆、虚妄に非ず。如来の
説法も亦復是の如し。大般泥洹經の四種の説は、悉く応ずる所有りて虚妄と為すに非ざるなり。

(大正十二、八七〇a、六一一〇行)

六巻本では、四相(法)とは衆生に依じて説かれるものであつて、時々によつて教えの説き方を変える事によつて、
その教えが偽りであるとは考へてはならないという文脈であると考ええる。

【大本】

仮使し、人有りて是の如くの言を作して、「是の如くの四事は云何が一と為すや、虚妄に非ずや」と。即ち依に

反質すべし。「是れ虚空、無所有、不動、無礙なり。是の如きの四事は何等の異有らんや。是れ豈に名づけて虚妄と為すを得るや」と。不なり、世尊よ。是の如きの諸句は即ち是れ一義なり。所謂、空義なり。自正、正他、能随問答、解因縁義も亦復是の如し。即ち大涅槃と等しくして、異有ること無し。

(大正十二、三八七b、一三一—一八行)

しかし、大本では、在り方としての四相は一義であり、「大般涅槃」の在り方と異なることは無いとしている。これは、「秘密藏」の内容である「伊字の三点」の關係を踏襲しているのではないだろうか。そうであるならば、四相の四つが個々別々として、又は段階を踏んでいくものではなく、四つが均等に備わり、機に應じて使い分ける事が「大般涅槃」なのである。

この「伊字の三点」の相即不離の關係が、六巻本との四相の総括の異なり(大本では四相が同じ意味を持つということ)を強調する点に影響を与え、「涅槃経」の「解脱」の示し方、「摩訶波闍波提憍曇弥」説話そのものを引き出すきっかけとなっているのではないかと考える。

(二) 秘密藏

次に、「伊字の三点」提示の発端となった「秘密藏」の語句が、最初に確認出来る哀歎品の箇所を見てみたい。

六巻本と大本は共に純陀品において、入滅するはずの釈尊から、真実には「如来が常住である」ことが示される。しかし、続く哀歎品では大本にのみ、比丘衆によって「秘密藏」という語句の初出とその内容の開示が求められ始め

る。その場面は次の通りである。

【大本】

「世尊よ、譬えば国王の諸子の形貌端正にして、心常に愛念し、先に伎芸を教えて悉く通利せしめて、然る後に將て魁膾に付して殺さしむるが如し。世尊よ、我等今日法王子と為り、仏の教誨を蒙るを以て正見を具す。願わくば放捨すること莫れ。如其（も）し放捨すれば則ち王子と同じからん。∴世尊よ、譬えば医王の善く方薬を解し、偏えに秘方を以て其の子に教授して、其の余の外の受学の者に教えざるが如し。如来も亦爾り。独り甚深秘密の藏を以て偏えに文殊に教え、我等を遺棄して顧愍せられず。如来は法に於いて心に慳悋無かるべし。∴唯だ願わくば如来よ、我等に甘露の正道を示導して、久しく世に住りて、涅槃に入りたまふこと勿れ」と。

（大正十二、三七六a、三一―二八行）

右の傍線部（以後、この大本にのみ存在する箇所をここでは「偏教文殊」と呼称する）の様に、純陀品において明かされた「如来常住」の説は、比丘衆によつて「秘密藏」と受け取られている。つまり、比丘衆は文殊師利だけに教えた秘奥があり、「私達にそれを教えずに入滅しないで欲しい」と、釈尊に懇願しているのである。

この「偏教文殊」は大本において、前節で取り上げた「伊字の三点」を引き出す役割を担っているものと考えられる。又、この「秘密藏」は「藏」されたものなのか、そうではないのかを問題として語られるのが、「波斯匿王」説話である。次に、「波斯匿王」説話の内容に大きく関わる「如来常住」の初出を確認する。

(三) 「如来常住」

『涅槃経』の根本的なテーマと言える「如来常住」という思想が表れ始めるのは、六卷本と大本共に純陀品からである。しかし、両本間では純陀品自体の構造に異なりが見られる。それは次の通りである。

【六卷本】

爾の時世尊、一切種智、一切の時を知りて淳（純）陀に告げて言わく、「如来、応供、等正覚と諸の大衆とは、当に汝の請う最後供養を受くるべし」と。時に諸天、人、阿修羅、如来、応供、等正覚、長者純陀の最後供養を受くるを聞く。

一切大衆、内に歡喜を懷き、異口同声に「未曾有なり」と歎ず。「善き哉、善き哉。純陀長者は、徳と願を満足せり、甚だ奇なり純陀よ。」

(大正十二、八五八 a、九—一三行)

右に示した六卷本では、釈尊に食を布施することを許可された純陀が、『涅槃経』の会に参集した大衆から褒め称えられる場面へと即座に移っていく。しかし、次に示す大本では、純陀が施食を許可された後、称賛を受けるまでの間に「二種施食」についてのやりとりが存在するのである。

【大本】

爾の時世尊、一切種智、無上調御、純陀に告げて曰わく、「善き哉、善き哉。我、今汝の為に貧窮を除断し、無上法雨を汝の身田に雨らせ法芽を生ぜしむるなり。汝、今我に於いて壽命、色力、安弁を求るを欲す。我当に汝に常命、色力、安無礙弁を施すべし。何を以つての故に。純陀よ、施食に二有りて果報に差無し。何等をか二と為すや。一は受け已りて阿耨多羅三藐三菩提を得。二は受け已りて涅槃に入るなり。我は今汝の最後供養を受け、汝をして檀波羅蜜を具足せしむるなり」と。

爾の時純陀、即ち仏に白して言わく、「仏の所説の如く、二施の果報に差別無しとは、是の義は然らず」…仏、言わく、「善男子よ、如来は已に無量無辺阿僧祇劫に於いて、食身、煩惱の身有ること無し。無後辺身、常身、法身、金剛の身なり。…我今、此の会の大衆の為に、是の故に汝が最後に奉ずる所を受くるなり。實には亦食せず」と。

爾の時、大衆、仏、世尊の普く大会の為に、純陀の最後供養を受くるを聞きて、歡喜、踊躍して同声に讚じて言わく、「善き哉、善き哉。希有なり純陀よ。」

(大正十二、三七二a、三一b、一五行)

右の傍線部の様に、大本では釈尊が純陀の施食を許す場面では、その当初から、釈尊によつて施食には二種ある事が言及される。²⁴⁾この言及をきっかけとした、右の箇所以降の純陀と釈尊の「二種施食」に関するやりとりは、六巻本には見られない。

「二種施食」とは『長阿含經』『遊行經』などから類推するに、一つは釈尊の成道直前のスジャータ（難陀波羅）に
よって乳粥を布施された事を指し、もう一つは成道後の最後の遊行中の釈尊に対して鍛冶工チュンダ（純陀）が布施
した食事の事を指すと考えられる。『涅槃經』純陀品では、上記の純陀の布施を題材として変形させて用いて『涅槃經』
を物語っていく発端としている。

しかし大本では、釈尊成道前のスジャータの布施と、成道後の純陀の布施とは「布施者への果報の違いがあるので
はないか」との問題提起が純陀によってなされる。これに対して釈尊は、無量阿僧祇劫の昔より既に食事が必要とし
ない身体、「法身」である事を明かす。そして、スジャータの乳粥を食したのは衆生を導くための方便であり、物語
上これから示すであろう入滅や純陀の布施を食すことも全ては衆生を導くためであると説明する。

この「二種施食」に関するやりとりのの中では、「如来常住」を示唆する釈尊の教説が存在するが、六巻本には「二
種施食」自体が存在しないのである。

では、六巻本ではどこで「如来常住」が示されるのであろうか。それは、純陀の施食が認められた後に始まる、純
陀と文殊師利との問答においてである。この問答は両本ともに存在し、ほぼ同内容である。

この問答は最後の布施者選ばれた純陀を文殊師利が試すような内容である。純陀が「如来をして久しく世に住ま
りて涅槃に入りたまわざらしめんと欲す²⁶」と発言したことに対して、文殊師利は「汝、今当に諸行の性相を觀ずべし²⁶」
と、たしなめることが契機となり問答が始まる。そして、純陀の「如来を諸行と同じく觀すること勿れ²⁷」という内容
の主張に対して、文殊師利が純陀の主張の正当性を認めて「汝は今……能く如来は是れ常住法、不変異法、無為の法
なるを知る²⁸」と、如来は常住であり、無為であることを示す。この後の問答は、釈尊にも純陀の主張の正当性が認め

られつつ収束していく。六巻本ではこの問答において初めて「如来常住」の考えが示されるのである。

純陀品における純陀と文殊師利との問答によって、六巻本と大本は共に『涅槃經』の根本的なテーマである「如来常住」を示し始める。大本では、この問答を念頭に置きつつ、先の「偏教文殊」において「如来常住」を『涅槃經』における「秘密藏」としているのだと考える。

「波斯匿王」説話は、釈尊が過去に示した「無常」の教えと、この純陀品において示された「如来常住」の教えとの矛盾を問題としているのである。

(四) 大本における説話の存在意義

前節までは、「伊字の三点」を中心として、その思想の根源を遡る様に確認した。簡単に正しい順を示すと、①『涅槃經』の根本的な思想として「如来常住」の教えが示される。②その「如来常住」を理解出来ない比丘衆が「秘密藏」と呼び、教えの開示を懇願する。③比丘衆の懇願に答えて、「秘密藏」と呼ばれる「如来常住」の内容として「伊字の三点」(解脱・如来身・摩訶般若)が示される。以上の順である。

右の術語の初出の順に沿うように、大本四相品に見られる「波斯匿王」説話には「如来常住」と「秘密藏」が、次の「摩訶波闍波提憍曇弥」説話には「伊字の三点」が影響を与えている。この事を改めて考察してみる。

「秘密藏」の内容である「伊字の三点」を重視する影響を受けて、「波斯匿王」の説話では「秘密藏」の捉え方として「藏」が問題となっている。ここでの「藏」は「秘密藏」を示しており、この「秘密藏」とは哀歎品の「偏教文殊」において比丘衆から「如来常住」の教えに対して名づけられたものであった。では何故、この「藏」が問題となるの

か。それは哀歎品において、「如来常住」を念頭におきながら質問される「無常想が最も大切な教えではなかったか」⁽²⁹⁾という比丘衆の認識に表されているように思われる。『涅槃経』においては、『涅槃経』が純陀・哀歎品で提示する「如来常住」という經典の根幹となる思想に対して、『涅槃経』以前の教えを守る者達の代表として比丘衆を対告衆としている様に見える。そして、その比丘衆の認識として先に挙げた哀歎品での「無常想が最も優れたものである」などが示されているのだと考えられないだろうか。つまり「波斯匿王」説話は、説話自体の主旨である「無常」の教えと『涅槃経』における「如来常住」の教えの矛盾を根本的な問題としつつ、「如来常住」を秘匿していたとする誤解を解く為に存在しているのだと考える。

次に「摩訶波闍波提憍曇弥」であるが、前節の「伊字の三点」でも述べた四相を一義として捉えるという四相の総括部分と同じく、「伊字の三点」の関係性を引き継いでいると思われる。この影響は、『涅槃経』の「解脱」を説く場合に関しても同じ事が言える。⁽³⁰⁾何故ならば、「くは解脱である。是れ即ち如来なり」という定型句によって羅列されていく『涅槃経』の解脱の示し方は、「解脱」という主語を使用しながらも如来について述べられている様にも見える。それは「伊字の三点」の在り方の様に、解脱と如来は異なるものではないことを示すものであると考える。この『涅槃経』の「解脱」が説かれる延長に存在する「摩訶波闍波提憍曇弥」説話では、説話の総括として「如来は或る時、一を説きて三と為し、三を説きて一と為す。」と、如来の説法は機に応じたものであると説明される。この様に、「伊字の三点」の三点の間にある相即関係の在り方から、『涅槃経』の経説と『涅槃経』以前の教えとの矛盾の解決を図っていると考ええる。

ここまでで、二つの説話が挿入されたのは、「如来常住」である「秘密蔵」とその内容としての「伊字の三点」の

考え方の導入による事が理解される。

以上の二つの説話が挿入された意図は、『涅槃經』教理自体の問題解決の為にあるのだろう。つまり、二乗と大乘の『涅槃經』との教説は乖離していない事を、具体例としての阿含經典などの教説を捉え直す事⁽³¹⁾で説明しているのだと考える。

五 おわりに

四相品までの『涅槃經』で重視されてきたのは、「無常」に代表される比丘衆とされる声聞以下に示した教えを前提として、『涅槃經』の「秘密藏」である「如来常住」の教えを説き明かす点である。「伊字の三点」などの大本固有思想は、伝統的な思想を前提としながら、両者の関係性を示す為の理論構築であったと考えられる。

その様な中で六巻本と大本との関係は、『涅槃經』両本に共通する思想を持ちながらも、『涅槃經』の思想の示方に成熟度合いの差が存在するように思われる。六巻本では經典の文脈の中で、漠然と『涅槃經』における涅槃と如来との関係などを示しているように見える。しかし大本では、より明確にする為に六巻本には無い「伊字の三点」などの語句や四相品の説話などを使用していると言える。

つまり、四相品までの大本『涅槃經』では、『涅槃經』の思想を端的に捉える為の指標として「秘密藏」や「伊字の三点」などの語句を使用しており、その指標となる語句を発端として、説話を挿入し、『涅槃經』とそれ以前の伝統的な思想との間には矛盾が無いということを表していると考ええる。

以上のことから、四相品までの六巻本に比べて大本は、思想自体と思想の伝え方が成熟していると言えるであろう。

【参考文献】

- 横超慧日〔一九八二〕『涅槃経―如来常住と悉有仏性―』（平楽寺書店）
 尾崎 勤〔二〇一三〕『涅槃経』の北本南伝と南本編纂の時期」（『佛教史學研究』第五六巻第一号）
 織田顕祐〔二〇一〇〕『大般涅槃経序説』（東本願寺出版）
 〔二〇一二〕『涅槃経における無我と私の教説』（『日本佛教學會年報』第七十七号）
 河村孝照〔一九七〇〕『大乘涅槃経における大般泥洹経と大般涅槃経との比較研究』（『東洋学研究』第四号）
 〔一九七四〕『大乘涅槃経における説話の素材についての一考察』（『印度學佛教學研究』第二二巻第二号）
 佐藤直美〔二〇一三〕『大般涅槃経』における仏弟子チュンダとその供養」（『日本佛教學會年報』第七十八号）
 布施浩岳〔一九四二〕『涅槃宗の研究 前篇』（一九七三）『涅槃宗の研究 前篇』復刻版を参照（国会刊行会）

注

- (1) 僧祐『出三藏記集』（大正五十五、一一b、一一―一二a、一四行）や慧皎『高僧伝』（大正五十、三三五c、一五―三三八b、二五行。三六七b、一八―三六八c、一行）、費長房『歴代三宝紀』（大正四十九、七一a、八一b、二八行。八四a、一九―八五a、一―一行）に依る。
 (2) 曇無讖訳『大般涅槃経』を基に、法顕・仏駄跋陀羅訳『大般泥洹経』によって品数や品名を含めた一部の校訂を行い、三十六巻本が成立したとされている。
 (3) 『出三藏記集』や慧皎『高僧伝』等に依れば本文に示した四三〇―四三三年頃となる。しかし、尾崎〔二〇一三〕によれば、南本再治の事業に参加した謝霊運の生涯を伝記等から読み解く事によって、北本が南朝に伝来する時期が四年ほど早まる可能

- 性があることが指摘されている。この尾崎氏の指摘によつて、南本『涅槃經』の成立が記録より早まる可能性があるのではないだろうか。
- (4) 『高僧伝』巻第七に見られる以下の文からは、劉宋に大本が伝わった当初から、同一の内容を持つ經典であるとの認識がなされてきた事が窺える。「大涅槃經、初至宋土。文言教善、而品数疎簡。初学難以措懐。嚴、迺共慧觀・謝靈運等、依泥洹本、加之品目。文有過質頗亦治改。始有数本流行。」(大正五十、三六八 a、二〇一—二三行。)
- (5) 現代における代表的な『涅槃經』研究である布施浩岳「一九四二」の第二章第二節第二項「六卷泥洹經檢考」に依れば、「北本涅槃の特異思想として増量せられたるは、伊字三点と本有今無偈であらう。前者は前に挙げたる如く数回にも互り強調せられ、六巻本には其の片影も認められぬものであつて、而かも涅槃教學の重要な教理上の典拠ともなる特質的思想であり」(九八頁)との見解を示されている。
- (6) 大本では寿命品中に含まれる箇所であるが、南本の品名を使用した。以降品名は便宜上、南本のものを使用する。
- (7) 河村「一九七〇」「波斯匿王」六三頁、「摩訶波闍波提橋曇弥」六六—六九頁。
- (8) 大本では四相品の四つ前の哀歎品において「伊字の三点」の記述が見られる。(大本) 大正十二、三七六 c、一一—一七行。
- (9) 大正十二、三八七 b、一三一—一五行。
- (10) 大正十二、三八七 b、一六一—一八行。
- (11) (大本) 大正十二、三八八 a、一一—一四行。(六巻本) 大正十二、八七〇 b、一〇—一三行。
- (12) (大本) 大正十二、三九〇 a、一四—一七行。(六巻本) 大正十二、八七二 a、一三—二二行。
- (13) (大本) 大正十二、三九〇 a、二八—b、七行。(六巻本) 大正十二、八七二 a、二—二六行。
- (14) 如来が衆生に段階的に教えを開示することを、長者とその子供に譬えている。「善男子、譬如長者唯一子、心常憶念憐愛無已、将詣師所欲令受学、懼不速成尋便将還、以愛念故昼夜殷勤教其半字、而不教誨毘伽羅論。何以故。以其幼稚力未堪故。…如彼長者教半字已、次為演說毘伽羅論。我亦如是。為諸弟子説於半字、九部經已、次為演說毘伽羅論、所謂如来常存不變。」(大正十二、六三〇 c、二二—六三二 a、二—三行)
- (15) 同内容を説く箇所と思われるが、六巻本では「蔵積」となっている。

- (16) (大本) 大正十二、三九一c、四行。(六卷本) 大正十二、八七二c、二二行。
- (17) 『大般涅槃經疏』(大正三十八、九二c、一六行)において、灌頂の師である智顛がこの箇所を解説したと言及によって、「百句解脫」の呼称が確認できる。これに倣い「百句解脫」と呼称する。
- (18) この譬喩は、獵師を煩惱に、それから逃げる鹿の群れを衆生に、獵師から逃れるために、鹿が三度の跳躍をすることを三帰依に譬喩している。(大本)「譬如群鹿怖畏獵師、既得免離。若得一跳、則喩一帰。如是三跳、則喩三帰。以三跳故、得受安樂。衆生亦爾、怖畏四魔惡獵師故受三帰依。三帰依故、則得安樂。受安樂者、即真解脫。真解脫者、即是如來。如來者、即是涅槃。涅槃者、即是無尽。無尽者、即是仏性。仏性者、即是決定。決定者、即是阿耨多羅三藐三菩提。」(大正十二、三九〇c、一〇一七行)(六卷本)「譬如群鹿遇諸獵師、危怖殆死。逃走山野、值仙人窟、便得蘇息安隱快樂。蘇息快樂、是名泥洹。其泥洹者、非為尽滅。於一切有、無量生死、傾倒煩惱、怨家解脫。方便逃避、得入正法仙人窟宅。牟尼止処、第三帰依。蘇息快樂、無量衆生。蘇息快樂、名為泥洹。非為尽滅。」(大正十二、八七五a、二五一b、二行)
- (19) (大本) 大正十二、三九六a、一七一行。(六卷本) 大正十二、八七五b、八一四行。
- (20) 『雜阿含經』(第一二二七経)(大正二、三三五b、八一c、一六行)と『サンユッタ・ニカーヤ』(「コーサラサムユッタ」が同定されている。この他、河村「一九七四」では指摘されていないが、『別訳雜阿含經』(第五四経)(大正二)、『増一阿含』四意断品中の第七経(大正二)、『仏説波斯匿王太后崩塵土空身經』(大正二)にも同様の説話が見られる。但し、今回は『雜阿含經』(第一二二七経)のみを対象とする。
- (21) 『中阿含經』「瞿曇弥経」(第一八〇経)(大正一、七二二c、二一七二三a、八行)と『マッジマ・ニカーヤ』(第一四二二施分別経)が同定されている。この他、河村「一九七四」では指摘されていないが、『仏説分別布施経』(大正一)、『賢愚経』(大正四)、『沙弥塞部和醴五分律』(大正二二)、『大智度論』卷二二「八念義之余」(大正二五)などにも類似する内容が確認できた。但し、今回は『中阿含經』「瞿曇弥経」(第一八〇経)のみを対象とする。
- (22) 注の五を参照。
- (23) 布施「一九四二二、九九頁、注の(八)。横超「一九八二」九六頁。織田「二〇一〇」六六頁、注の(1)などに依る。
- (24) 『涅槃經』を軸とした純陀の供養という事跡に関しては、佐藤「二〇一三」において多くのテキストとの比較考察が行われて

いるので、そちらを参照されたい。

- (25) (大本) 大正十二、三七三c、五一六行。六巻本でもほぼ同内容である「願使如来長存於世不願泥洹」(大正十二、八五九b、二二行)
- (26) (大本) 大正十二、三七三c、一〇一一行。六巻本では「当作是觀。有為行法性自如是」(大正十二、八五九b、二二二三行)と、こちらの方が分かり易いか。
- (27) (大本) 大正十二、三七三c、二二行。六巻本では「莫作是觀、如来、応供、等正覺、是行數也」(大正十二、八五九c、七一八行)など。
- (28) (大本) 大正十二、三七四b、一九一二〇。六巻本では「応如是知、如来常住、無為、非變易法」(大正十二、八六〇a、二七一八行)
- (29) (大本) 「於諸想中、無常想為勝」(大正十二、三七七a、一行) 六巻本では「世尊、法中以無常想為第一」(大正十二、八六一c、二〇一一行)
- (30) 四相品以前の長寿・金剛身品での「如来身」の説明の完了と、名字功德品の「大般涅槃」の語句の使用によって、哀歎品と四相品での「伊字の三点」の内の一つが「如来身」から「涅槃」へと変化していると考えられる。又、四相品での「伊字の三点」開示後には、『涅槃經』の「解脱」が説かれている事から、「伊字の三点」とは開示以降の經典の流れ示すものとなっているのではないかと考える。
- (31) 河村「一九七四」において、『涅槃經』の説話素材を現存する資料から見出す作業が行われている。その中で「波斯匿王」や「摩訶波闍波提憍曇弥」などの説話素材を、阿含經典や南伝大藏經から同定している。そして、その成果として「大乘涅槃經が、小乗の教理、教説をじゅうぶん承知し組み入れていた」(三八九頁)との結論に至っている。

